様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７０９１１

研究課題名（和文）大正～昭和戦前期、東京における東アジアの思想交流

研究課題名（英文）Taisho ~ Showa prewar , East Asian thought exchanges in Tokyo

研究代表者
ベ　ヨンミ（BAE, YOUNGMI）

立命館大学・立命館グローバル・イノベーション研究機構・研究員

研究者番号：８０６１２５５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：戦前、東京における東アジアの青年たちの思想交流は、1910年代の運動組織としての新亜同盟党から、1920年代には公論の場としての雑誌『亜細亜公論』と『大東公論』へ、1930年代には学術の場としての早稲田大学へと、その空間とメンバー、主な機能を変えつつも、絶えることなく行われた。また、その思想が、帝国日本から朝鮮、台湾、中国へという一方的な伝播されただけでなく、交流、つまり相互に影響し合い、さらに、東京で培われた人的ネットワークが継続された。

研究成果の概要（英文）：Before World War II, the young people of East Asia in Tokyo had kept exchanging their thoughts each other, even though the member, the place and the primary function of them had been changing, they had been started from “ShinA-Doumeitou” as an activist organization in 1910’s, and they had shifted their movements into the public magazines “Asia Kouron” and “Daitou Kouron” as a place of public opinions in 1920’s, and then they moved the place of them into Waseda University as academic place in 1930’s.
Their thoughts had been spread to Korea, Taiwan, and China from the Empire of Japan, it had been not one-directive but interactive, and those thoughts exchanged and influenced each other. And moreover, they had kept the human network formed and fostered in Tokyo during the period.

研究分野：朝鮮近現代史、日韓関係史

キーワード：東アジアの思想交流　植民地朝鮮と台湾の留学生　雑誌『亜細亜公論』　早稲田大学東洋思想研究室　李相佰

１．研究開始当初の背景

『亜細亜公論』（1922 年 5 月創刊～1923 年 1 月）・『大東公論』（1923 年 7 月創刊号と 1924 年 2 月 2 号のみ現存）は 2008 年に復刻された。短命とはいえ、東京に集まっていた東アジア青年の思想交流の場としての史料的価値は高い。しかし、復刻当時の解題を含めても研究は多くなく、復刻・解題に関わった 3 人の研究者―後藤幹一氏、紀旭峰氏、羅京洙氏―による数編の論文が挙げられる程度である。もちろん、彼らの研究は両雑誌の大略を知る上で欠かせない。紀旭峰は台湾・中国人とのかかわりを、羅京洙は発行者の柳泰慶（朝鮮人）を、後藤幹一は日本人執筆者の特徴を分析し、非常に示唆に富む。ただし、それぞれ台湾と中国、朝鮮、日本を個別研究対象とした上、時期的にも発行時期に限られている。そのため、発行時期前後の日本、また植民地朝鮮と台湾、中国の社会的、思想的状況において、この雑誌と、紙上で形成された知のネットワークが持つ意味と位置づけを明らかにするまでに至ったとは言い難い。

一方、この雑誌関連のほかにも、当該時期を対象にし、一国史を越えての交流やネットワークに注目した研究も存在する。姜徳相氏は 1919 年 3・1 運動後に作られた朝鮮の上海臨時政府との関係性の中で朝鮮人・中国人との交流を（『呂運亨評伝＜1・2＞』、新幹社、2002 年・2005 年）、石坂浩一氏は社会主義運動における朝鮮人・日本人の交流を（『近代日本の社会主義と朝鮮』社会評論社、1993 年）、また松尾尊兊氏は朝鮮人と「民本主義」日本人知識人との交流を（『民本主義と帝国主義』みすず書房、1998 年）取り上げ、研究成果を積み重ねてきた。しかしこれらの研究は、特定の時期・組織・運動・思想に制限されているという限界が指摘できる。

ここで、本研究において、大学院在学時から植民地期における朝鮮人留学生の実態と思想、運動、在日朝鮮人コミュニティとの関係、日本人・日本の団体や政策との相互関係など、在日朝鮮人留学生に関して総合的な研究を行ってきた、研究代表者の成果（博士論文「1920 年代における在日朝鮮人留学生に関する研究―留学生・朝鮮総督府・「支援」団体」2010 年 3 月／「朝鮮総督斎藤実と阿部充家による朝鮮人留学生「支援」」、『日韓相互認識』第 4 号、2011 年 3 月、「一九二〇年代の「内鮮融和」政策と在日朝鮮人留学生―寄宿舎事業を中心に―」『歴史評論』第 729 号、2011 年 1 月など）を土台とする。また現在、早稲田大学アジア太平洋紀機構のプロジェクトとして『東洋思想研究』からみる戦前期の早稲田大学で学んだアジア留学生について研究している。この二つの成果を活かし、上記雑誌の特徴と、そこで形成された東アジア青年の思想交流を明らかにすることは、一国史中心史観を克服し、トランスナショナル的な歴史研究が盛んな近年の東アジア近代思想史研究にも一助できるものと思われる。

２．研究の目的

本研究は、大正期～昭和戦前期に東京を舞台として行われた東アジア青年たちの思想交流とその歴史的意味を明らかにすることを課題とする。具体的には、『亜細亜公論』（1922 年創刊）と、その後身『大東公論』、そして早稲田大学東洋思想研究室教員の津田左右吉とその門下生の朝鮮・台湾、日本人大学院生の思想交流の成果である『東洋思想研究』（1937～1940）に集った筆者の構成と、文章の内容が、当時の日・朝・中・台の相互関係及び社会的状況の下でどのような特徴を持つのかを、思想史的に分析する。この事例を中心に、帝国日本から外地（朝鮮・台湾）・中国へという一方的な思想伝播でない、相互交流の実像と意味を探ることを本研究の目的とする。

本研究期間内に明らかにしたいこと―全体構想―を、四段階に分けて示すと以下のとおりである。

まず、第一段階では、本研究の基礎となる雑誌を分析する。主史料である『亜細亜公論』・『大東公論』、『東洋思想研究』の性格と特徴を把握する。次の第二段階では、研究協力者との緊密な連携をもって、研究の質を幅の向上を図る。研究代表者が朝鮮史専攻であるため、本書類 4 頁に研究協力者として挙げた、日本・中国・台湾の近代史研究者の協力が不可欠である。この協力の下、両雑誌に集った各国青年個々人の分析と、彼らの思想や活動が、当時の当該国の社会的状況においてどのような位置づけになるのかを明らかにする。第三段階においては、このネットワークが、雑誌廃刊後、日本、ないし筆者たちが帰った後の朝鮮・中国・台湾において、どのように活かされたのか、又は活かされなかったのか、それはどうしてなのかを検討する。最終段階では、帝国日本の首都東京において、弱者の立場に立った東アジア青年同士の連帯と、大学院レベルの学術交流を可能にした、思想交流の背景と意義を分析する。そこから当該機の思想史研究における従来の帝国日本から外地（朝鮮・台湾）・中国への一方的思想伝播という図式を乗り越え、その地点から現在の「東アジア共同体」構想に対する歴史的教訓までを見据え、研究成果の刊行に向けて取り組んでいく。

３．研究の方法

研究代表者は、相互作用の存在と役割、その結果を念頭に置いた研究を行ってきた。留学生と朝鮮総督府の政策、「支援」団体との関係においても、留学生が政策や「支援」団体に一方的に規定されず、相互作用が存在し、そこから主体性が見出せることを明らかにする研究方法を用いていた。ところが、従来の朝鮮近代史研究は、西洋→日本→朝鮮という一方的影響関係の枠組みを持つものが多

かった。もちろん大きな潮流としては正しいともいえる。しかし、このような分析では、相互作用が看過され、規定される側、つまり西洋や日本に対する朝鮮の主体性も看過されやすい。この点に関しては同じく日本の植民地であった台湾の近代史研究も例外ではなかろう。

近年、近世史研究においては、朝鮮通信使や燕行使など、朝鮮王朝と中国、日本間における人的・物的交流が注目されはじめているが、植民地支配と戦争が大きな比重を占める近代史においては、今も相互作用やネットワークより、支配と被支配、圧迫と抵抗という二項対立的な枠組みが多く取り入れられている。ゆえに、研究の内容においても、研究の手法においても、相互作用を重視して行う本研究は、従来の研究成果から学びつつも、その限界を乗り越え、新たな成果を生み出せるものと考える。

本研究は、社会思想史研究の方法をベースにし、組織活動を中心に分析する運動史研究の方法を取り入れた研究手法を用いて行われる。本研究課題に取り組むためには、まず（１）大正期～昭和戦前期東京に集まっていた朝鮮、中国、台湾人、なかでも留学生の実態を踏まえる必要がある。同時に、彼らを取り巻く日本人・日本社会との関係を明らかにすることが研究の基礎を成す。この段階では、主に社会史（教育史を含む）分野における各国留学生の研究をまとめることが必要である。次には、（２）当該時期における、在日朝鮮、中国、台湾人と、彼らと関わりを持つ日本人の、言説や活動、組織運動などを分析する。この段階では思想史と運動史研究の方法を用いる。最後には、（１）と（２）をまとめた上で、大正～昭和戦前期、東京における東アジア青年の思想交流の意義と特徴、その後における影響をトランスナショナルヒストリーとして考察する。

４．研究成果

(1)2013 年度－関東大震災と東アジア

関東大震災から 90 年にあたる年であることから、関連する研究の深化と研究交流の進展において有意義な一年だったため、震災関連研究に焦点が当てられた。なかでも、9 月に行われた国際シンポジウム「関東大震災朝鮮人虐殺から 90 年、国家暴力と植民地主義を超えて」において、研究報告「朝鮮人虐殺の前奏曲と震災後もう一つの虐殺―新潟県中津川と三重県木本の朝鮮人労働者虐殺事件―」を行ったことが主な研究成果である。なぜなら、本研究課題である大正～昭和戦前期、東京における東アジアの思想交流を考える際、1923 年に起こった関東大震災は欠かせないためである。震災の際、日本の軍、自警団、民衆による朝鮮人虐殺は、日本と朝鮮、とくに被災地＝虐殺地であった関東一帯における日本人と朝鮮人との関係に大きな影響を与えた。民衆レベルにおいても思想的ネットワークにおいても同様であった。その点から、関連研究を発表し、日韓の専門家と一緒に議論した経験は貴重である。具体的には、新潟県中津川と関東大震災、そして三重県木本で起きた朝鮮人虐殺事件は、いずれも日本の国家権力と民衆の暴力により、殺されなければならない理由もない朝鮮人たちが虐殺された。その意味では、日本・日本人は加害者であり、朝鮮・朝鮮人は被害者である。しかし、事件後、その真相究明と被害調査・救済、記録・記憶・追悼においては、加害者／被害者という二項対立的には構図を超え、志を一つにしていた日本人と朝鮮人が行動をともにした。この点においては、本研究課題の「知」の交流を超えた「行動」の交流、つまり連帯であったといえる。シンポジウムでは、このような歴史的事実に鑑みたとき、現在の在日朝鮮・韓国人に対するヘイトスピーチに抗するための、日本人と在日朝鮮・韓国人の間の連帯は、その教訓が活かされた、とても意義のある行動であるという評価が成された。ただし、その背景にある、当時の植民地支配と現在の歪んだナショナリズムや排外主義にも、やはり共通した点があることを真摯に受け止めるべきである。そして、さらなる加害／被害を生まないために、今こそ、平和と人権を守るための日韓、東アジアの「知」の交流が必要であるという問題提起が共有された。

(2)2014 年度－書評と現地踏査から得たもの

2014 年度には、雑誌『亜細亜公論』、『大東公論』、そして早稲田の留学生たちと『東洋思想研究』分析を進めつつ、前年度の震災研究の成果「関東大震災時の朝鮮人留学生の動向」を、共著『関東大震災　記憶の継承』（日本経済評論社、2014 年）に収録した。また、『北方部隊の朝鮮人兵士－日本陸軍に動員された植民地の若者たち』（北原道子、現代企画室、2014）と『朝鮮独立運動と東アジア-1910－25』（小野容照、思文閣出版、2013）を書評した論文を発表した。とくに後者は、まさに本研究が対象とする時期に、日本、朝鮮、台湾・中国をまたぐ東アジア青年たちの活動を、社会主義活動を中心に分析した著書で、近年の研究書の中では、研究代表者の問題関心と最も近いといえる。書評は自分の研究論文を書くよりも難しいと言われるほど、高度の分析と評価の能力が問われる。その点で、研究協力者でもある小野容照氏の著書の書評論文を書いたことは、研究テーマに関する研究活動に大いに役に立った。そして、この書評論文を書いたことがきっかけとなり、実際に中国や台湾に訪れ、朝鮮と台湾・中国人同士、または支配／被支配の枠を超えて行われた、東アジア青年同士の交流の歴史と現在について、フィールドワークと資料調査を行った。直接現地に赴き、自分の足で歩いてみてこそ、書籍や記録、文献だけでは実感し切れない、リアルな歴史に出会うことができ

た。植民地支配や戦争は国家間、民族間という、大きな構図によって分けられるが、人々の「知」と「行動」は必ずしもそれにとらわれないネットワークのなかで行き来し、互いの刺激と影響を及ぼしたのだと、強く感じた。一方、「ヤスクニ問題」をテーマとするシンポジウムとフィールドワークへの参加のためのドイツ訪問も、本研究課題を実行するに当たり、時間と空間、両方の研究視野を広げてくれた。参加した動機は、東アジア－日本と台湾・中国、韓国－の間で起こっている、靖国神社をめぐる対立と葛藤などの問題について、従来のように東アジアだけ、または日本と台湾・中国・韓国のいずれかの国の二国間の問題だけで捉えるのではなく、視点を変えて捉えなおしてみようという問題意識からであった。日本と同じく敗戦国として、戦後、ヨーロッパでかつての占領地や交戦国との関係をギクシャクしながら再構築してきたドイツの視点から見てみたいということであった。この点についてもいろいろと示唆することが得られたが、それより、本研究課題である、東アジア青年たちの「知」の交流が、戦後、遠い地のドイツにおいて、新しい形で形成され、行われていることがわかったことが大きな収穫であった。敗戦国かつ東西冷戦の最前線という特徴がもたらした意外な結果であると感じた。そのドイツであるからこそ、韓国の民主化運動や南北コリアの統一のための運動が現地の人々に支えられて行われたし、同じドイツに生きる日本と韓国系の人々によって日韓間の親善や真の和解のためにさまざまな取り組みが成されていたのである。これは、まさしく本研究課題の対象時期、つまり大正から昭和戦前期において、植民地宗主国であった日本でこそ、東アジアの青年たちが集い、そこで「知」のネットワークを築けたことと共通している。

(3)2015 年度-早稲田の『東洋思想研究』と李相佰、「知」の接触領域

最終年度の 2015 年度には、それまで中心的に取り組んできた朝鮮人学生の早稲田留学の全体的、歴史的推移と李相佰という個人を中心とした早稲田との接点、そして「知」のネットワークについて分析した成果を、「李相佰、帝国を生きた植民地人－早稲田という『接触領域』に着目して－」という論文として書き上げ、共著『留学生の早稲田』（早稲田出版部、2015）に収録した。当初の研究目的や方法としては、早稲田大学東洋思想研究室教員の津田左右吉とその門下生の朝鮮・台湾、日本人大学院生の思想交流の成果である、雑誌『東洋思想研究』を分析するつもりであった。しかし、研究活動を進めていくなか、雑誌だけにこだわらず、早稲田という学校をきっかけにして形成されるネットワークと、その一環としての『東洋思想研究』を分析することに少し方向が転換した。このような研究課題にとってふさわしい人物として、李相佰を選択した。李相佰は、早稲田第一高等学院から 14 年間も早稲田に在学しながら、1930 年代には東洋思想研究室で社会学と歴史を学び、韓国の社会学界を生涯主導した「東洋史」研究者である。彼と指導教員たる津田左右吉との学問的関係を直接知り得る資料は存在しないが、津田の研究を批判的に受容した李相佰の研究内容、そして李相佰や台湾人留学生の郭明昆などと一緒に研究活動を行っていた時期の津田の文章から、当時の早稲田大学、東洋思想研究室がまさに東アジアの「知」の交流の場、つまり「接触領域」であったことは明らかであった。また、彼は研究者であった同時に、早稲田のバスケットボール部から始まり、戦前日本と解放後韓国のスポーツ界を代表した、帝国と現代韓国の屈指のスポーツ人でもあった。しかし、その優れた能力と実績のため、戦時期には日本の中国侵略、支配政策の一端を担わされることもあった。このような彼の対日協力行為は学徒動員と同様、帝国と植民地の間に存在した「知」の交流の場（＝「接触領域」）が本質的に持っている非対称性や暴力性が戦時下で最も鋭くあらわれた事例といえる。

総じて、早稲田大学で学んだ朝鮮人は人的ネットワークとそれぞれの専門を生かし、植民地期朝鮮と韓国社会において大きな役割を果たした。そのなかで、李相佰の津田左右吉や日本人、台湾人学生との交流、スポーツ界での活躍は、留学先でアジアの学生たちと一緒に「知」の相互交流を行い、それが相互にとって刺激となっていたという相互関係を示してくれる。書名が『早稲田の留学生』ではなく『留学生の早稲田』になったのもこの点を強調するためである。この相互関係の歴史こそ、現在の歪んだナショナリズムや排外主義の問題を解くために、歴史から見つけ出さねばならないカギであると考える。

(4)2016 年度-今後の研究展望

研究目的の一つであり、助成期間内に成すべき課題であった、雑誌『亜細亜公論』と『大東公論』については、シンポジウム「雑誌『亜細亜公論』と早稲田：留学生とアジアの公共空間の創出」（2016 年 10 月 14 日、早稲田大学）で、発表することが決定しており、現在最終とりまとめの段階に入っている。なお、シンポジウム「東アジアの選挙と民主主義」（2016 年 7 月 2 日、早稲田大学）では、本研究助成によって培われた研究者ネットワークとそれまでの研究成果を活かし、大正から昭和戦前期の歴史に鑑み、現在韓国における青年問題を中心に据えた、選挙と民主主義について研究発表を行う予定である。二つのシンポジウムは、両方とも、東アジアという観点から、日本、朝鮮（現代韓国含む）、台湾、中国、四つの視点に立つ研究報告と議論が予定されており、本研究課題の今後の発展に大いに役立つものと期待できる。

最後に、2013 年度から 2015 年度までの研

究成果と上記の 2016 年度の研究発表はすべて、本研究助成によって、広範囲の資料調査とフィールドワーク、研究者同士のネットワーク作りができたために可能であったことを、特記しておきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
①裵玲美、「日本そしてサハリンへ送られた朝鮮人兵士の軌跡を丹念に追う」、『インパクション』、Vol.195、2014、pp.136-137、査読無

②裵玲美、「小野容照『朝鮮独立運動と東アジア-1910－25』書評」、『日本植民地研究』、Vol.26、2014 年、pp.59-64、査読無

〔学会発表〕（計　2　件）
①裵玲美、「早稲田の朝鮮人留学生と李相佰（イサンベク）」、朝鮮史研究会関西部会月例会、2015 年 7 月 25 日、大阪河合塾（大阪府・大阪市）

②裵玲美、「朝鮮人虐殺の前奏曲と震災後もう一つの虐殺―新潟県中津川と三重県木本の朝鮮人労働者虐殺事件―」、関東大震災 90 周年国際シンポジウム「関東大震災朝鮮人虐殺から 90 年、国家暴力と植民地主義を超えて」、2013 年 9 月 7 日、立命館大学衣笠キャンパス創思館（京都府・京都市）

〔図書〕（計　4　件）
①裵玲美　他、早稲田大学出版部、『留学生の早稲田―近代日本の知の接触領域』、2015、315（211-259）

②裵玲美　他、日本経済評論社、『関東大震災　記憶の継承―歴史・地域・運動から現在を問う』、2014、301（209－222）

③裵玲美　他、インパクト出版会、『銀幕のなかの死刑』、2013、135（70－80）

④　裵玲美　他、UniStory、『동아시아의 전쟁기억-트라우마를 넘어서-[東アジアの戦争の記憶―トラウマを超えて―]』（韓国語）、2013、227（115-137）

６．研究組織
(1)研究代表者
裵　玲美（BAE, Youngmi）
立命館大学・立命館グローバル・イノベーション研究機構・研究員
研究者番号：80612556

(2)研究協力者
①日本側
桂島　宣弘（KATSURAZIMA, Nobuhiro）
勝村　誠（KATSUMURA, Makoto）
李　豪潤（LEE, Hoyun）
洪　宗郁（HONG,Jongwook）
小野　容照（ONO,Yasuteru）
酒井　裕美（SAKAI,Hiromi）
②韓国側
権　泰億（KWON,Taeok）
李　基勲（LEE,Gihoon）
朴　賛勝（PARK,Chanseung）
③中国、台湾、米国側
歩　平（PU,Ping）
許　寿童（HUR,Soodong）
紀　旭峰(KI, Kyokuhō)
アンドレ・ヘイグ(ANDRE,Hagg)